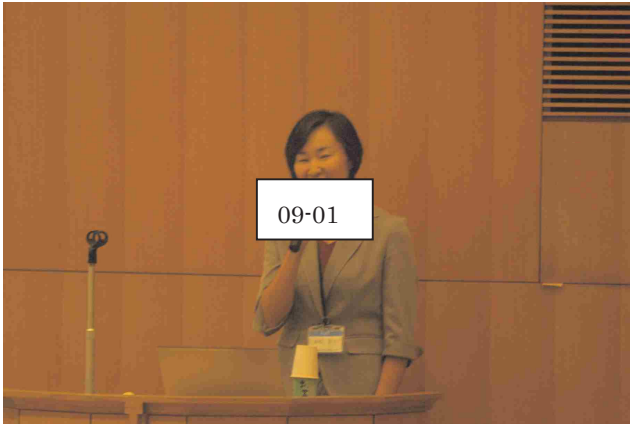


口頭発表「獣医師との連携による継続的なモルモット飼育について」

赤松小学校 校長 茂呂 美恵子
主任教諭 吾郷 良子



1 はじめに

本校では、平成元年からモルモットの飼育活動を始め、現在にいたるまで1, 2年生の生活科活動の単元の一つとして位置付けられている。

現在では、5匹のモルモットをクラスごとに交代でお世話をしている。

主に2年生が飼育活動を行い、2学期末に2年生から1年生に引き継がれる。

1年間の飼育活動ではあるが、日常生活の中で、自然や小さい生命との触れ合いが乏しくなっている現状の児童にとっては、飼育を経験することによって、「やさしさ」「思いやり」「責任感」「協力」などの心をはぐくむことができると考えている。

2 生活科における飼育活動設定の理由

身近にいる生き物を飼ったり育てたりしながら、育つ環境、変化や成長の様子に関心をもち、生き物も自分たちと同じように生命をもってすることに気付き、小さな生命への思いやりの心をもつようにすることを目標としている。

【単元目標】

飼育活動を通して、生き物との出会いを楽しみにし、その姿や鳴き声、肌触り、息づかいを感じとったり、生き物が育つ環境に関心をもち、自ら考えたり調べたり、変化や成長の様子を自分なりの方法で表現したり、生き物の世話を通して、その成長や変化に喜び、生命の大切さを実感する。

3 飼育活動に関する子供の実態

(1) 生き物への興味関心は比較的高い。校庭で

見付けたダンゴムシやアリ、おたまじゃくしをつかまえて、飼おうとしたり、可愛がったりしている。

(2) 家庭では、カブトムシや金魚など生き物を飼った経験のある児童は約4割いる。哺乳類などは少数である。

(3) 家庭での飼育に関しては、自分自身で責任をもって世話をするというより、周りの大人が中心に世話をを行い、児童は手伝うというかわり方が多い。

(4) 1年生は2年生のモル世話の様子に興味をもって見ている。また、休み時間などに2年生がモルモットと遊んでいるのを近くで見ている、抱き方などを教わっている場面も見られた。2学期に引き継がれることを楽しみにしている1年生も多い。

4 飼育活動の実際と活動での子どもの姿

(1) 日常的な世話

現在、本校で飼っているモルモットは5匹。毎日、餌やり、水替えと糞尿がたまる床部分の新聞の取り換えを清掃時間に行い、週1回ケージの清掃を各クラスで分担し協力してお世話をしている。えさは、牧草を中心とし野菜や果物を家庭から少量持ってきて、モルモットフードに混ぜて与えている。



【ケージ清掃の様子】

週 1 回のケージ清掃が終わったあとは、「触れ合いタイム」として、モルモットと交流する時間を設け、モルモットと触れ合う時間を十分にとっている。普段、ケージの中にいるモルモットを広い場所に出して遊ばせたり、えさを食べさせたり、暗いところを作って隠

れ場所を作

ったり、モルモットのことを考えて、モルモットのためになることを自分たちで考え、行動している。

最後に、学級で集まり、お世話や「ふれあいタイム」で発見したことを発表し合い、次の飼育に生かせるようにしている。



【触れ合いタイムの様子】

(2) 観察記録カードより

● モルモットの特徴

「気持ちが良い時は、キュイキュイと鳴きます。」

「赤ちゃんモルモットは、とっても元気で、よく動きます。」

「黒まめは、おじいちゃんだけど、抱っこされるのが一番上手だね。」

「冷やしたペットボトルをゲージに入れると、クーラー代わりになるって獣医さんが教えてくれたね。」

● 食べ物について

「くろまめにりんごをあげたら、うれしそうだった。」

「モルモットににんじんをあげたら、おいしそうに食べていました。」

「野菜はあげてもいいけれど、おやつなんだって、初めて知ったよ。」

「食べさせるときは、モルモットが草をく

わえたら、手を離さないとかまれてしまいます。」

● モルのすきなこと・場所

「マシュマロは、恥ずかしがり屋なので、隠れるのが好きです。」

「モルモットは、じめじめした所が嫌いだから風通しがよいところに置くようにしよう。」

「マッサージをしたら、とても気持ちよさそうに、目を細くしたよ。」

(3) 獣医師との連携を図った授業

「ふれあいタイム」から東京都小学校動物飼育推進校として2年目を迎え、獣医師との連携を図り、1, 2年生の実態に合わせた年間指導計画を立てている。

事前の打ち合わせや授業を含め、30時間の計画を立てている。モルモットの飼育をすでに始めている2年生は、7月、10月と11月に各2時間ずつ獣医師によるモルモットとの関わり方や「命の大切さ」についての話や子どもたちとモルモットの普段の触れ合いの様子を参観しながら、直接子どもたちに指導をしていただいている。

また、担当教員の相談にも答えていただいたり教員向けの研修会の講師も務めていただいたりし、学校全体で小動物の飼育に対して、共通理解が図れるよう指導と助言をいただいている。このように研修会などで共通理解できたことをもとに、夏季や冬季休業期間の保護者ボランティアによるモルモットのホームステイへの共通理解に活かしている。



【獣医師からの助言をいただいている様子】

(4) 国語・生活科での授業から

● 国語

「どうぶつ園のじゅうい」

(光村図書 上巻より)

本単元は、動物園の獣医の1日を通して、時間的な順序や事柄の順序を考えながら内容の大体を読み取り、感想をまとめたり発表したりすることをねらいとしている。

そこで、授業の導入部分で獣医師に、様々な動物との診察や治療の様子などについて話していただいた。また、実際の様子が分かる写真をプロジェクターで教室に投影し説明をいただけなので、その様子を知ることができた。

また、獣医師が過去に動物園の獣医をしていた経験があったので、説明も分かりやすく児童もイメージがつかみやすかった。

● 生活科

「いきもの 大すき」(光村図書より)

本単元では、児童が小動物であるモルモットを継続的に飼育する活動である。飼育活動をしてみて分かったことや思ったこと、気付いたことを伝え合い、1年生への引き継ぎに向けて、これまでの飼育活動から気付いたことなどを振り返り、自分の成長についても捉えられるようにすることもめざしていく。

全単元20時間中の第15時間目の授業を紹介する。

この時間は、モルモットのお世話について振り返り、自分ができるようになったことや分かったことについて話し合い、1年生との引き継ぎに向けて準備をする段階に入っている。

そこで、本時では小動物や自分たちの心音を比べる活動から生命の尊さを感じ、各児童がモルモット飼育で1年生に伝えたい大事なことを考え、付箋に表現する活動を設定した。

● 授業の展開

- ①モルモット、ウサギ、人間の心臓の音をスピーカーのついた聴音器で聞く。
- ②思ったことや気付いたことを話し合う。
- ③獣医師の話聞く。
- ④自分たちが伝えたい「1年生に伝えたいモルモットのお世話で大事なことを決めて、伝え方を考える。

獣医師の話では、児童の反応からそれぞれの心音の違いについて、個体の大きさと心臓の大きさの関係や脈拍の違いなどについて分かりやすく説明をしていただいた。

児童は、獣医師の話聞いてから、1年生に

飼育を引き継ぐ上で大事なこととその訳を付箋に書き、伝えたい順番を決めていく活動をした。

● 付箋に書かれた内容

・抱き方

「だっこをするときは、脇から抱き上げて自分のおなかとモルモットのおなかをくっつけてね。そうすると、モルモットが嫌がらないよ。」

・えさ

「決まった量を必ずあげようね。食べ過ぎは、モルモットの体によくはないよ。」

・モルモットのゲージや飲み水用のボトル

「おしっここのところはブラシで良く洗って、雑巾でよく拭いてね。濡れているところは嫌がるよ。」

「飲み水用のボトルは、毎日よく洗って清潔にしようね。モルモットも気持ちよく水を飲むよ。」

・心音のちがひ

「心臓がドクドクする速さが速いほど、動物は命の長さが短いって教わったよ。だから、大事にお世話しようね。」

児童は、小動物や自分たちの心音を比べる活動から生命の尊さを感じ、モルモット飼育の引き継ぎに向けて、1年生に伝えたい大事なことに自分の意見をもったりそれを共有してまとめたりすることで、命をつないでいくことの大切さを味わうことができた。

(5) モルモットの世話の引継ぎ

2学期の11月、1年生にモルモットの世話の引継ぎを行った。

● 注意してほしいこと

「だっこするときは、モルモットの両脇に手を通すと暴れないよ。」

「立ったままのだっこはモルモットにとっては怖いことなので、座ってだっこしようね。」

「人差し指を目の前にだすと、かみついてくるよ。」



【モルモットが暴れない抱き方を教えている】

● 掃除のコツについて

「ケージなどを洗うときは、水がはねるので、あまり強く水を出しすぎない。」

「ごみを捨てるときは、新聞紙の端と端を持って捨てる、やりやすいです。」

「干草を入れるときには、干草ケースを隣に置いて入れるとこぼしません。」

このように、世話の引継ぎでは、異学年との関わりを学ぶだけでなく、どうしたら1年生が上手にお世話できるかという問題意識をもって活動するという取り組みになっている。引き継ぎを終えた後は、獣医師から1年生に向けてモルモットは親しみやすい動物であることや小さな命の世話をする責任について伝えていただいている。



【モルモットの健康観察をしている様子】

5 飼育活動による成果

生活科の基本は体験である。モルモットという「対象」との関わりから「体験」が生まれ、その体験をもう一度振り返ることで「気づき」が起こる。さらに、その「気づき」を教師が見取って、カードに朱入れをしたり、「どうしてだろう」など問いかけたりすることによって、「知・情・意の活性化」が生じ、問いが生まれたり、納得したり、共感したりなどさまざまなことが起こり、「次にこうしてみたらどうか」という次の活動が誘発されていく。

つまり、獣医師との関わりが、体験を振り返り気付いていく過程において、子どもたちの思考に十分にこたえている。こうしたサイクルの積み重ねによって「学びの質」を高められているというのが、本校の実践の大きな成果である。

こうした学びの質の高め方は、他教科の問題解決学習へと結び付いているとも言える。

そしてまた、子どもたちがモルモットという命に触れ、純粋に愛おしいという感情をもち、生命を尊重しようとする道徳教育にも役立っている。

6 課題

こうした取り組みは、生活科という教科を通した1、2年生だけのものであり、他の学年では行われていない。そのためか、低学年では頑張っている、高学年になるとウサギやその他生き物の世話などを、積極的にやりたがらない児童が増える。

動物飼育を通した学びが、小学校生活の中で一貫とした教育となつて、高学年になつても継続できるように、学習計画やカリキュラム、またモルモットの飼育形態や環境設定などの在り方についても見直す必要があると言える。